長生村長賞

大阪府／80歳／男性／無職

打浪（うちなみ） 紘一（こういち） 様

✉手紙の相手：妻

道代さんへ

夜中にふと目覚め周囲を見回す。部屋の中は真暗で闇に眼が慣れるまでしばらくかかる。そのうち、隣りのベッドで眠っている君の様子が気になる。深い眠りの中にいるのか、君はビクとも動かない。その静かすぎる様子が僕を不安にする。息をしているだろうか？僕は君の顔に手のひらを近づける。かすかな寝息が感じられると僕は安心し、これで明日も今日と変らぬ一日が始まると信じて、再び眠りの世界に引き込まれて行く。最近はこんな日が多くなってきた。僕はすでに八十歳になり君は七十八歳だ。加齢とともに身体のあちこちに不具合を感じることも多くなったね。

今後は一層お互いに助け合わなくてはならない場面が多くなりそうだ。君になるべく負担をかけないように、自分のことは自分でできるように、健康と知力、体力の温存が現在の僕の最重点課題だと思っている。

振り返れば結婚して五十五年間、君は陰日向なく僕に寄り添い助けてくれた。社会でも家庭でも、君という伴侶がいてこそ僕は頑張り続けられた。そのことに深く感謝している。

僕は無事に定年まで勤めを続けられたが、大した地位にもつけず、大きな家も、あり余る財産を持つこともできなかった。こんな僕にずっとついて来てくれた君に、僕は「幸せ」を与えることができたのだろうか。でも、君は現在を「幸せ」だと言ってくれる。その言葉が僕の何よりの励ましになっている。

長い間孫のいなかった僕たちにやっと初孫の光が生まれた。これからは新米のじいちゃん、ばあちゃんとして、光の健やかな成長を見守るという素適な役目が生れたんだ。そのためにも、君には十分健康に注意して無理をしないでほしい。そして末長く僕のそばにいて、昔と変らぬ優しい笑顔を見せ続けてほしい。君の笑顔は家族みんなの宝物だから。

僕も一日一日を大切に生きたいと思うので、どうか今後ともよろしくね。愛をこめて。

≪手紙への想い≫

自分自身が老いと向き合う中で、真摯に日々の生活に向かっているその方の後姿に学ぶところが多く、感謝を伝えたいという想いで書きました。